

ぶつきょうつうしん じねん けんきょ おし がつごう
仏教通信「自然（じねん）と謙虚さの教え」10月号

わたし とくてい しんこう も つ いな みずから むしんろんしゃ しょう しょうがい いちど いの ささ
私たちは、特定の信仰を持つか否か、あるいは自らを「無神論者」と称するかにかかわらず、生涯で一度も祈りを捧げたことのない
ものはいないのではないのでしょうか。古来より、仏教の如来や菩薩、そして、聖書やコーランに記された唯一の神、または神道やギリシ
ヤ神話、ヒンドゥー教の神々など、絶対的な存在（神仏）が人々に語り継がれ、信仰や畏怖の対 象となってきました。神仏や特定の
宗 教を信じていなくとも、人生の岐路に立たされた時、命の危機に直 面した時、あるいは愛する者の 命が失われそうになった時、
私たちはその願いを叶えてくれる「何か」へと祈らずにはいられないでしょう。

いの こんげん こうだい うちゅう しぜん せつり まえ とき にんげん むりょく なが あらが ちい せんざい
この祈りの根源には、広大な宇宙や自然の摂理を前にした時、人間がいかに無力で、その流れに 抗 うことのできない小さな存在であ
るかという、自然（宇宙）に対する畏怖の 心 のあらわれがあるのかもしれませんが。だからこそ、先人たちは「自然」の道理と人間の 営
みについて思惟を重ね、宗 教や哲学が 形 づくられてきたのだと思います。例えば、親鸞聖 人の師である法然上人は「自然法爾」を
と にんげん さくい どりょく こ あみだぶつ じ ひ はたらき すく かんが かた ちゅうごく どうかしそう
説きました。これは、人間の作為や努力を超えた阿弥陀仏の慈悲の働きによって救われるという 考 え方です。また、中国の道家思想の
そ ろうし じんいてき はい うちゅう ほうそく しぜん ことわり み ゆだ みち い かた と わたし
祖である老子も、人為的なものを排し、宇宙の法則、自然の 理 に身を委ねる「道（タオ）」の生き方を説きました。私たちはこれまで、
かがくぎじゅつ はってん しぜん しはい めぐ むじんぞう きょうじゅ さっかく しそう げんだい
科学技術の発展によって自然を支配し、その恵みを無尽蔵に享 受 できるかのように錯覚してきましたが、これらの思想は、現代におけ
る S D G s や自然保護の理念とも共 鳴する思想です。自然界から 遠 かった現代人の我々が、今一度、自然や宇宙の摂理に対し、謙虚
にむ あ もと
に向き合うことが求められているのではないのでしょうか。

そして、この「祈り」は、単に個人の願望成 就に留まらず、他者の幸福を願い、実際に行動を起こす「利他行」や、キリスト 教の他者
をゆる りんじんあい かんが にんげん こだい おこな つづ いの ねん こうい あいて
を赦す「隣人愛」へとつながっていくと 考 えます。そうすると、人間が古代から 行い続ける「祈り」や「念じる」という行為は、相手
の立場に立つ「共 感」（エンパシー）へと通じ、ひいては「多様性」（ダイバシティ）を認める精神性へとつながっていくのではないでし
ょうか。仏 教では、私たちは生まれながらにして仏 性（仏の種）を持っていると説きます。この仏 性は、他者の苦しみに寄り添い、
とも よろこ わ あ かのう わたし たしや おも くる なや ひと たす ねが こんげん しつ
共に 喜 びを分かち合うことを可能にし、私 たちが他者のことを思い、苦しみ悩んでいる人を助けたいと願う根源となります。この「悉
有仏 性（全てのものに仏の種が宿っている）」という仏 教思想は、先入 観や固定観念にとらわれず、相手を受け入れて尊 重する姿勢
につながり、私 たちが目指すべき理想の 姿 である「共 感」や「多様性」を示していると言えます。

いの みずか ころ おく やど こえ みみ す おも じぶん たいわ
「祈り」とは、自らの 心 の奥に宿る声に耳を澄ますことだと思えます。この自分との対話こそが、
ふか じぶん み じぶん なやみ おも じつ にんげんだれ かか くのう
深く自分を見つめ、「自分だけの悩み」と思っていたものが、実は「人間誰もが抱える苦悩」であるこ
とに気づきます。同じ苦しみを持つことで、他者への共 感を 育み、自然（じねん）の 理 との深い
むす き き さいしょ いっぽ わたし みな しんしん おくそこ ほとけ たね ぶっしょう
結びつきに気づく、最初の一歩となるでしょう。私 たちは皆、心身の奥底に仏の種（仏 性）、すな
わち「慈悲」の可能性を宿しています。この可能性を謙虚に、そして大切に 育 むとき、私 たちは必ず
や あらそ の こ へいわ じぞくかのう せかい みらい とも きず あ しん がっしょう
や、争いを乗り越え、平和で持続可能な世界という未来を、共に築き上げることができると信じています。 合 掌

